
大嫌い

ゆや

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大嫌い

【Nコード】

N7485U

【作者名】

ゆや

【あらすじ】

チートな双子の妹を持つ真柴出は、私立とはいえ偏差値の低い高校に通う極々平凡な女子高生と豪語する悪戯好きな女の子である。2月14日、バレンタインその日、彼女はまるで4コマ漫画のような出会いをする。

基本的に、主人公の出番がありません。

短編の方の「大嫌い」が好評だった為シリーズ化しました

プロローグ

私には双子の妹がいる。二卵性である。

妹は、真っ直ぐの綺麗な黒髪を伸ばして、バサバサの長いまつ毛は円らな目を囲い、可愛らしい顔にはあまり似合わない、ボンキュッボンのナイスバディの持ち主。

ここで余談だが、遺伝上の問題で、どんなに美男美女の親であろうと、その子供は決して綺麗な容姿を携えて生まれてくるわけではない。それはパーツの問題だったり、先祖返りであったりと様々。

そもそも、体のパーツは遺伝なのだから、完璧に遺伝の組み合わせだろう。だから、母親が大きくパッチリ二重の目、父親が釣り目で一重の目。母親のおっぱいが巨乳、父方のおばあちゃんが貧乳。母方のおじいちゃんが身長が小さい、父の身長が高い。とか、そんな感じの部分的な遺伝子の違い。そういう一つ一つのパーツが良い感じにバランス良く成り立って出来るのが、人の容姿なのではないかと思っっている。

だから、美男美女から生まれる子は決して美男や美女に生まれてくるわけではない。目が似てるとか、鼻の形がそっくりとか、顎ラインが綺麗とか、それ、その部分しか似てるところがないだけだろ。とかツッコミたい。

つまり総合的に見れば、そんな大した事ない人なんて五万といるのだ。

で、その代表的なありきたりな遺伝子を持って生まれた私の親は美男美女。

目の形は母親似なのに、父親譲りの一重瞼。鼻の形はそんなに悪くはない。むしろ唯一気に入っている顔のパーツである。膨らみの少ない唇は残念過ぎる事に父親譲り。唇にコンプレックスを抱き、どれだけ父に恨みを抱いた事か。双子の妹は素晴らしいバディなのに、

貧相な私の胸も残念過ぎる事に父方のおばあちゃん譲り。何度父に殺意を抱いた事か。

身長だって、父親譲りの高身長をゲットした妹が羨ましい。私は母親譲りの低身長である。おじいちゃんのバカ。でも、おじいちゃん子の私はおじいちゃんの事が嫌いになれない。

そんなわけで妹はそんな形をしているから、学校じゃモテモテらしい。逆ハーレム作って、ついでにチートな能力まで備わっているらしく、いろんな部活に駆り出されて、女子にもモテモテ。今年は生徒会長に大抜擢され、更に目立っているみたいだ。頭も頗るよろしく、財閥の御曹司達にも気に入られている。らしい。しかも、超が付く程の天然の初で、どMなもんだから、攻められるとかなり弱くなるんだとか。

以上、私が電話で両親から聞いた事である。

ちなみに私はそんな出来すぎた妹が大嫌いなので、やつすいボロアパートに一人暮らししながらバカでも行ける私立の高校に通っている。不良がわんさか居る高校だが、大人しく地味で真面目な生徒をやっている。絡まれる事もなかった。たまに、私の靴を入れるロッカーの中に、お隣のマドンナと間違えてラブレターが入っていて、中を見てみれば「今日のパンツは何色？」と変態語が書かれてあった。吃驚したが、とりあえず「真っ赤なふんどし」と書いて、マドンナのロッカーの扉に挟めておいて、こっそり見ていたらうちの生徒会長様が、それを手にして見ていた。うちの生徒会長様はメタボの気になる、ヲタクっぽい男だった。結果、なんか、落胆していた。ちよつと面白かった。

その場面を運悪く、不良に見られ、不良の溜り場に連行された。

「あれ、お前だろ？」

「……………？」

とりあえず、首を捻っておく。

昔、お母さんが言っていた。なんかようわからない事情に巻き込まれたら、とりあえず何も喋らず首を捻っておけ。と、それでお父さんはいつも騙されてくれたから。と、

「その仕草は可愛い子の特権であって、ブスがやってキモさが増すだけだ」

お母さんの嘘つき！！

とりあえず、この男の胸倉掴んで、タコ殴りする勇気と力をください。神様。

「お前も面白い事するよなあ」

神様、愉快そうに笑う目の前で笑う男にリアット食らわせたいです。勇気と力をください。

「い、いえ、そんな、職員室に置いてあった担任のカツラをわざと落し物として届けたのは私じゃないです…」

「お前かよ、あの犯人！そのせいでやってもいねえ、俺等がとばつちり受けたつっ一の！！」

やった神様！知らない内に報復してたぞ！

「それじゃなくて、」

「いつだったかの売店のプリンまとめ買いも私じゃないです…」

「またお前かよ！！！！」

うちの学校のプリンは激ウマだ、一人何個まで、とか制限されていなかったから、まとめ買いして家でガッツリ食べていた。翌日の体重計の上は地獄です。

「うえ…？……………じゃあ、校長の肖像ポスターの鼻に画鋏刺しまくって大きな」

「それもお前かああああああああ！！！！！！！！！！」
潔く、海老反りを食らった。

「全部の悪質な悪戯はお前だろー！！」

「ぐああああ！！ギブギブ！！」

床をバシンバシン叩きながら、大きなダメージを食らった事を猛烈にアピールしていた。

「お蔭で、俺がどんだけ教師達にやってもいねえ事で説教されてた
と思つてんだゴラ、あ！！！」

巻き舌で怒鳴られ、危なく三途の川を渡りそうになっていた所をよ
うやく解放された。

「…おばあちゃん、生きてるはずなのに三途の川の向こうで手、振
つてた…！」

「死に際なんじゃねえか？テメエのばあちゃん」

「なんて縁起の悪い事を！」

「お前名前は？」

「自分の名前を名乗るのが先でしょ！」

「ほほう。口裂け女にしてやるうか？」

「真柴出です！」

多分、男が言い切る前に言つたと思う。コンプレックスの唇ではあ
るが、口裂けにされるよりは断然マシである。

「…真柴？真柴入と親戚か何かか？」

「……………？」

首を捻つて知らん顔。入は私の妹の名前である。

頭の弱い両親が、頑張つて考えてくれた名前だ。気に入つてはいな
いけど。

「だから、それは入みてえな可愛い女がやる仕草だつての」
よくよく見れば、男の顔は整っていた。

野獣を連想させるような力強い色素の薄い茶色い目は、釣り目で長
いまつ毛が囲っている。卵型の綺麗な輪郭、スーウツと通った鼻筋、
眩しいぐらいにキラキラの金髪は近くで見れば、傷んでいた。

「知らない人だし」

知ってるけど。

「知らねえはずはねえだろ。入は、お前の話をよくしてる」

「でも、私は知らない」

「……………」

ポケットから、ある物を取り出して、目の前の美形に握らせる。

「じゃあ、もう行くから」
握らせたのは私の置き入りのチョコである。
ポケットに入っていたので半分溶けかかっているが。それを渡して、私は速攻逃げた。今日がバレンタインというイベントである事を忘れ。そして、そのポケットに入っていたチョコが、自分が一年生きて頑張ってきたご褒美のバレンタイン仕様に包装されたものだという事も頭の片隅にもなかったのである。

それから一か月が過ぎ、不良に連行されたあの日から一切絡まれる事なく平和ボケした日常を送っていた。たまに、私のロッカーと隣のマドンナのロッカーを間違えて、生徒会長様の変態語が書きつづった手紙に返事を書いたりして、豚が来てそれを読んで泣いているのを見てキモがっていたり、職員室にあった先生のカツラを掲示板に張ったりもした。多分、不良の奴等辺りがまた怒られたであろう。ざまあ見る。

「真柴出！」

「……………はい？」

振り向けば、そこに立っていたのは知的系の美形様だった。少女マンガから飛び出してきたような生徒会長さまに、現実はある豚なのに。と、内心愚痴った。

襟足までのびた黒髪。ピツシリと着こなした制服に、インテリ眼鏡。ほほ笑んだ顔は道行く人の歩みを止める程に麗しい。

姿勢よく、上品にこちらに歩み寄ってきた美形は私の目の前で跪き、私の左手を軽く持ち上げ、薬指の付け根にキスをした。

「え？」

「先月のお礼だ」

私を見上げてきた美形はそう言っつて、私の薬指にはキラキラと光るダイヤが眩しい指輪を填めた。

「え？」

ますます意味がわからなかった。

「一か月前、真柴出、お前からチョコを買った時からずっと気になつてた。だから、この一か月ずつと君を見ていたら、好きになつた。好きになつただけじゃない。今、凄く君が欲しくて堪らない。俺と、恋人になつて」

「……………え？」

「一か月前？確かに不良にチョコを上げた。でも、それは自分のチョコだったからで、……………え？」

「そうだ。ちょうど一か月前といえば、バレンタインじゃないか！！！！忘れていた！忘れていたさ！ああああああ！！！！自分のバカ！！」

「入の姉だから好きになつたんじゃない。出だから好きになつたんだ。頷いてくれないなら、うちの財閥の総力をあげて、無理矢理にでも手に入れる」

「そ、総力、あげて…？ちなみにどんな？」

「例えば、無理に二人つきりになつたり、授業を途中からサボつてもそれすら揉み消したり、金があれば、どんな奴も跪く時代だ。出来ない事はないだろ」

「ポカーンと思わず、口を開けてしまふ。」

話から察するにあの不良イコール、目の前の男。そして、その目の前の男は財閥の御曹司様。そういうのつてチートで逆ハーレム作つている妹に流れていくんじゃないのか？

「そんなに見られていると勘違いして、押し倒しちゃうけど？」

咄嗟に後ろを向いたら後ろから抱きしめられた。どさくさに紛れて、胸も激しく揉まれた。

「好きだよ」

「……………」

ここで頷かなければ、レイプ紛いな事をされそうだ。ただでさえこの容姿だ。むしろ私がこいつを襲ったと認識されるかもしれない。

これは……………」

「ハイ」

頷くしか道はないだろう。

「よし。良い子だ。俺の名前は篠田優貴しのただ ゆき。よろしくな？出

「え？あ、うん」

どうやら、私の運もここまでらしい。夫にするんだったら、三流家庭生まれの二男か三男坊で、ごくごく普通の男がよかったが、それを口に出せば、もっと酷い事になると私の頭の中の警報器が鳴っていた。

出会い

真柴出。

この間、俺にチヨコを渡して逃げて行った女は、今俺の頭の中を独占している。

俺は人が嫌いだった。

なんでも出来て、色んな奴から好かれてて、優しくて、便りになって、素直で、可愛くて、いつも彼女は知らず知らずの内に俺のダチ皆の心を癒していった。昔から色んな事を言われ、育ってきて俺達は人間不信に陥り、俺等の間でも言えない事は多々あった。なのに、人を前に、皆は心の引っかかりを取り除いた。

それが怖かったのかもしれない。だから、俺一人だけこの高校に編入した。有名私立の高校に通っていた時と違って、ここは気の休まる場所が沢山あった。俺を慕う奴等と一緒にバカやって、たまに教師からの説教を受けて、喧嘩して体がボロボロになったのにも関わらず、毎日喧嘩した日もあった。胸糞悪い喧嘩もあれば、心が晴れ晴れとした喧嘩もある事に気付いた時は、もう辞められないとさえ思った。

だから、毎日が充実しているように思っていたある日に、出と出会

つて、自分の中の何かが音を立てて始めようとしていた。

出を見た時、冴えない女が悪質な悪戯をしているように見えた。だから声を掛けて、今じゃ気心の知れた仲間とたむろしている空き教室に連れて行き、改めて出を見た。

鼻の形が入そつくり。顔の輪郭も、目の形も。なのに、美人じゃないのは、きつと顔のパーツの配置なり、大きさの違いとかで残念な顔になっているからだ。親戚か何かか？

「あれ、お前だろ？」

「……………」

首を傾げる女に、はっ倒したい気持ちになるのをグツと抑える。

「その仕草は可愛い子の特権であって、ブスがやってもキモさが増すだけだ」

そう言えば、女の眉間に皺が寄って信じられないという顔をされた。その顔で、どれだ

けの自信を持っていたのだろうと疑問に思うところだ。

「お前も面白い事するよなあ」

「い、いえ、そんな、職員室に置いてあった担任のカツラをわざと落し物として届けたのは私じゃないです…」

「お前かよ、あの犯人！そのせいでやってもいねえ、俺等がとばつちり受けたつっの…！」

そもそも俺等なら落し物として届けるといふ悪質な事をするより、速攻燃やす。

「それじゃなくて、」

「いつだったかの売店のプリンまとめ買いも私じゃないです…」

「またお前かよ…！！」

そういえば、ある時、プリンを食べようと思って売店に行けば早くも売り切れの紙が貼られてあった事があった。

「うえ…？……………じゃあ、校長の肖像ポスターの鼻に画鋏刺しまくって大きな」

その一言が決定打だった。コイツは、出は入の事をコンプレックスに思っている。美人な身内と比べられた数年間は計り知れない憎悪をもたらしたのだろう。

「知らねえはずはねえだろ。入は、お前の話をよくしてる」

入は、家族の事をなんでも話す。当然、出の事も話題に上る。入は完璧身内贖罪で出を可愛くて優しいのだと言う。多分それは、出が人に悟られないように自分を押し殺していた結果だろう。

「でも、私は知らない」

「……………」

出は気付いてないだろう。その目が憎悪と嫌悪の炎で燃えている事を。

「じゃあ、もう行くから」

スカートのポケットから綺麗に包装されたバレンタインチョコを受け取り、少しの間それを眺めていた。

冴えない女。なのに、入という存在のせいで自分に陰を持たざるをえなかった女。劣等感という感情は知らない。そういう対象は近くには居なかった。同情してる？してるんだろうな、完璧あの女に。学校からの帰り道の途中で携帯が鳴った。着メロはクラシック。最近つるんでる奴等がロックとか、バラードとか最近人気の曲をよく進めてくるかた、クラシックと言っても最近耳にする曲のクラシック版というだけで、クラシックでもなんでもないけど。

携帯を開けば入の名前が目に入る。出ようか出まいか迷って、結局出ない事に決めて、着信を止めて電源を落とす。

「ひどーい!!!なんで出てくれないの!!!?」

後ろから女の高い声と昔からのダチ数名。

「なんで出てあげないんだ?」という非難の眼差しを総無視して、何しに来たんだと目で訴える。

四人の個性的な友人達は、互いに牽制しながらも、入の近くを離れようとしなない。

「今考え事してたんだよ。だからお前に構う暇ねえの」

「あ、いいのかな?そういう事言っちゃっていいのかな?そういう事言う人には入ちゃん特性のチョコあげないんだから!」

「んな、毒物とつと捨てる」

入は料理が下手だ超人的な下手さを披露してみせた有名私立校入学一年目の春の調理実習は地獄を見た。あの情景が一気に蘇る。

なぜ、卵を包丁で切ろうとする。玉ねぎの皮剥きすぎだ、それ何も残ってねえじゃねえか。鶏肉をそのままフライパンに入れようとするな何を作る気だ。おい、なんで汁が緑色してるんだ。秘薬でも作る気か、それとも何かを召喚する気なのか、という注意という説得丸無視したこの女は恐ろしい事に、同じ調理室で調理していた生徒と先生を合わせて四人ほど、悪臭だけで病院送りにして、更に悪臭を充満させた調理室で楽しそうに何かを作っていた。既に生徒達は調理室から避難していて、作業を続けている人をドアに詰められたガラス越しから皆で見守った。親子丼の見る影はなく、完璧に魔女が作っているような秘薬だ。あれ、本当に卵と玉ねぎと鶏肉と、だし汁と醤油と酒と砂糖で出来てるのか?絶対に違う。もしそれがそうなら材料はどれだけ残念な末路を辿っている事になる。これならいつそ腐らせてあげた方がマシだと、そう思えるほどに入の料理は見る物を恐怖に陥れる。

「ひどーい!!!一生懸命作ってたんだよ!」

「一生懸命殺傷能力の強い毒物作るなって言ってるんだよ」

「むう。皆、私が選んで買ってくれたチョコが良いって言うから、買ったチョコプレゼントしたんだけど、私どうしても手作りチョコ作りたかったんだもん！だから、これ、優貴にあげる！」

「ふーん」

大事に親友を売ったのか、という視線を四人に向ければアツサリと明後日の方向を向きやがった。

「味見したのか？」

「していないけど」

「今すぐ、それ開けて自分で食べて、自分の料理音痴を自覚しろ」

「ヤダ！それじゃ、私が病院送りになっちゃうじゃない！」

「自覚してんならそれすぐに捨てる。それに俺は今年、本命の女（予定）から貰ったチョコがあるからいらん」

「本命の女！？」

声を揃えて驚く五人はあり得ないという表情でこっちを見てくる。

酷いのはお前等だと言いたい。

毎日が詰まらなくて

毎日が色あせていた

無駄に広いベッドから起き上がるとシャワーを浴びる。金色に脱色した髪は痛みすぎていてキューティクルがボロボロだ。

そういえば、出の髪は柔らかそうだった。黒い髪に光が差して白い光沢が出来ていて、俺の髪とは違って手入れがされていた。

出と出会えてから学校に行っても、喧嘩しても、仲間とバカやって、何をしても気持ちが悪くなくなってしまった。

これでは昔と一緒にだ。何をしても楽しくなくて、ただ、毎日を楽しそうに笑ってる人を見るのが凄く苛立たしかった。周りの人間全員巻き込んで笑う人は、俺にはどうしても受け付けなかった。それを親友に言った事はなかった。アイツ等は人の事が好きだから、きつと「なぜ好きになれない」と逆に聞かれそう、そうしたら俺はきつと「入みたいな女が嫌いな事知ってる癖によく言う」と決まった言葉を吐き捨てるんだろうな。

昔、親友のアイツ等と出逢う前に入みたいな女が俺の傍に居た。そ

いつは、よく笑う奴で、クラスの人気者だった。何事にも一生懸命で、努力を怠らない。掃除や、ウサギの餌やりも積極的にやっていた。そいつの事を俺は、好きだった。でも、そいつは誰にも気のあやうなそぶりを見せていて、何人の男がそいつが自分の事を好きだと勘違いしたかは知れない。

夏の暑い日の放課後、教室に残って、友達と談笑していた俺にそいつはいきなりやってきて、綺麗な顔を歪ませて、俺に言う。

「どうしてみいちゃんを振ったの」

俺の勝手だろう。そう思ったが、言葉を選びながら優しい口調で言う。

「好きじゃないから」

「どうして好きじゃないの？みいちゃんはあんなに篠田君の事が好きなのに！」

「……………は？」

啞然とした。この女は、何を勘違いしているのかはわからないが、俺が誰と付き合おうとアタには関係ない。それどころか、好かれる努力したのに断るなんておかしいとさえ思っている顔だ。

何がおかしいって、好きになった奴に良い所を見せようと努力をするのは普通じゃないのか。それともなんだ。そういう努力をした奴は必ず報われなきゃいけないのか。それじゃあ、異性にモテる奴は大変すぎるだろ。

「なんで、自分の気持ちを抑えて付き合わなきゃいけないわけ？アタは努力したからって、誰とでも付き合えるわけ？」

「そ、そういう事、言ってるわけじゃない……！」

「言ってるだろ」

「私はただみいちゃんの事を思って」

「そういうのさあ、そのみいちゃんって子から見たら迷惑なんじゃないの？」

誰からも好かれる女。その女が怒りにフルフルと震えて涙を堪える。

「篠田君って…最低な、人だったんだね……っ！」

「特に、球技大会、マラソン大会、学校祭は特に念入りに。後、体育と調理実習も欠かせず取れよ。出のジャージ姿に、出のエプロン姿なんて萌えるだろ」
木村が更にどん引きしていたのを知っていて、あえてそれを無視した。

イメチェン始めました（前書き）

携帯小説を愚弄する表現が出ます。そんな自分も軽く傷ついた件 W
W
W

イメチェン始めました

盗撮された出の写真を見ながら、仲間から出の情報を聞く。

「真柴さんの男の好みは、知的系の人らしいツス。それから、実家を離れて一人暮らししてるようツス」

なるほど。知的系か……。知的系ってどんなのだ？髪、黒く染めりやいってわけじゃないよな。

「……………口調からなんとかしてみるか…」

「知的系なら、本読むツス！本！はい、星の王子様ツス！！」

「知的でもなんでもねえよ。こういうの、苦手なんだよ…」

「なんスか？篠田さんも自分と一緒に活字が苦手なんスか！？」

やけに嬉しそうに言う仲間の一人は、『星の王子様』を適当に教卓に乗せると、今度は漫画を取り出そうとしていた。

「いや、俺…………横文字じゃないとダメで」

「え？携帯小説ツスか？」

「誰が、アマチュア以下のど素人が書いた小説読むんだよ。そうじゃなくて、英文とか、海外の小説」

「……………」

カチーンと固まったそいつの名前は、百合沢ゆりさわ 臨のぞ ふわふわとした茶色い髪は天然物だ。詳しく聞いた事はないが祖母がどこかのクオーターらしい。頭の中は常に花畑が広がっているのか、発想がガキである。

「特にファンタジーとミステリーが好きだな。それ以外は面白いとは思わない」

「じゃあ、それ以外は日本の小説のが面白いかツスか？」

「違う。それ以外はどこも同じレベルって事だ」

「へえー…自分はSFとか好きなんスけど…」

「それはわかる。アニメと漫画の話のレベルはやっぱり日本のが一番高い。発想力なら日本人が一番ある事がわかる。特に今の若い奴

の考え方は新しい発見があったり……」

「ストップ。ちょっとストップ。篠田さん、なんだかその言い方どつかの会社の社長のセリフッス」

しまった。いつも休みになると父親の仕事を手伝ってるからそういう癖がつい出てしまった。

「篠田さん。中身の方の知的な感じはバツチリッス」

パツチリとした黒目の百合沢は可愛い系男子。身長も166?と、下手したら女子よりも低い身長はよけいに百合沢の可愛さを引きだしている。しかも人懐っこい性格もそれに拍車を掛けている。本人はまるで気にしていないからいいんだろうけど。

「そうか？」

「なんていうか、きつと篠田さんは何もしなくてもテストで良い点数とか余裕で取れちゃうタイプッスよ」

「……………いつも平均点以下なんだが……………」

なんて鋭い……。確かにテストはいつも手をスカスカに抜いて平均点以下を狙っている。そうすればなんとなく、「アイツは不良だから頭が悪くて当然」みたいな空気になって、教師の方から諦めてくれる。

「後は口調と、態度と見た目じゃないッスかね」

「よし、任せなさい」

とりあえず早速黒染めを買う事にした。

次の日、黒く染めた髪に教師達は感動していた。

「篠田！ようやっと髪を黒く染めたのか！！」

「心を入れ替えようと思ひまして」

ニッコリと爽やかスマイル。この笑顔を見せるのは何年ぶりだろうか。でも、これで出に好かれるなら、我慢だ。

「……………」

呆ける教師達を通り過ぎ、いつものように空き教室に行き、百合沢の報告を受ける。

「篠田さんの事でこのクラスも話が持ちきりらしいツス！」

「らしいってなんです。情報は確実じゃないとダメなんですよ」

「ええー。それより、真柴さんはメガネ萌えらしいツス。なんでも黒縁じゃなくて、クールにノンフレームか、銀フレームじゃないとダメらしいツス」

「いつも思うんですが、その情報どこで仕入れてくるんです？」

「真柴さんと同じクラスの俺のダチツス。なんでも真柴さんの隣の席みたいで、彼女と彼女の友達の会話がよく聞こえるみたいツス」
なるほどそれでか。なんて羨ましいポジションなんだ。

俺も出の隣の席に居たい。いつも一緒なんて嫉妬でそいつ殺してしまいたい。

「なんか不吉な事考えてねえツスか？」

「気になさらないでください」

フツと笑って、愛読していた本を取り出す。

「本当に全部英語ツス！」

「静かにできないんですか？静かに出来ないならここから出ていきなさい」

軽く手であしらうと、百合沢は余計に俺に縋り付いてきた。

「篠田さん、一日で別人になりましたね。不良の雰囲気全然ないのに、逆らっちゃいけない雰囲気パネエツス」

「なんですか、それ。意味がわかりません。だいたい、俺は」

「あ、一人称は僕のがもつと知的雰囲気出ると思われツス！」

「……一理ありますね」

なんて寒気の走る……。いや、これも出の為だ。我慢我慢……。一人称はだいたい“僕”と使う時はなかなかない。仕事で“私”ならよく使うからそっちのが抵抗がないからどうだろうか、と百合沢に聞けばそれだとなんだか固いから却下だそうだ。

一人称一つでも雰囲気が変わるらしい。

出がもし、一人称を“俺”にしても、“僕”にしても結局可愛くてたまらない。なるほど、これが惚れた弱みという奴か。

「後はメガネですか」

「こんな事もあるうかと伊達メガネツス！」

手渡されたのは、赤フレームの安っぽい伊達メガネだった。

「やめましょう。何故かドキドキが止まらないツス」

意味がわからない。

双眼鏡で、友達らしき女と話している出は実に可愛い。なんて可愛さだ。アホ面でグ　コポーズやっているその姿でさえ可愛い。

「恋は盲目ツスね！」

隣で、スナック菓子を食べている百合沢が、僕の行動を見てそんな事を言った。遠回しに、あんな恋愛視出来る方が難しいと言われている気がしてならない。

「ところで、百合沢」

「はいツス！」

「君、僕を差し置いて出とお喋りしたらしいね」

「いやあ自分、真柴さんと同じクラスなもんで、今週は真柴さんと週番ツスから」

色々と探りいれられますと言われ、出の情報は一つでも多くほしいからなんとか我慢する。本当は百合沢をタコ殴りしたいが、出が百合沢に無駄な心配を掛けるかもしれない。そこから始まる恋愛だつてある。なんとしても阻止したいものだ。

「それじゃあ、一先ず、誕生日と家族構成を聞いてきてください」

「わかったツス！」

素直な百合沢は、放課後になるとクラスに戻って行った。…後を追いついて、こっそりと廊下から会話を盗み聞く。

こんなストーリーカーみたいな行動は初めてだ。だがしかし、少しの間だけでも出の声が聞こえると思えば幸福な時間だ。

「真柴さん、真柴さん！」

「ヘイ！カストニーニヨ！」

「相変わらず意味がわからないツス！」

カストニーニヨってなんだ。どういう意味だ。これは勘でしかないが、適当に言ったんだろう。そんなアホな出も可愛いぞ。

「真柴さんの誕生日っていつツスか？」

「え？んー… 8月の2日」

よく考えてみれば、出は入と双子なんだから、誕生日が一緒だ。知ってたよ俺、…おつと僕。そういえば、あの双子はあまりに似ていない。二卵性といえど似るはずなんだが…。きつと良いとこの遺伝子全部、人に行っただろうな。

「あ、自分と誕生日近いツスね！自分も8月の7日が誕生日ツス！」

「おお。近い」

「自分の誕生日って忘れちゃうんすよねえ
忘れんな。」

「わかるわかる！」

出もか。一人暮らしらしいから、きつと日にちの感覚とかなくなるんだろうな。暑かったら夏。寒かったら冬。ちょうどいい気温が、秋か春かのどつちか。とかアバウト過ぎるか…。

「そういえばさあ、百合沢ってハーフなの？」

「えつと、アメリカ人の血が八分の一入ってるツスけど、もうほぼ日本人ツスね」

「へえー。茶色い髪って天然？」

「天然ツス。自分もお気に入りの髪ツスよ」

「ところで百合沢さあ、隣のクラスの七倉さん知ってる？」

「知ってるツス！なかなか可愛い子ツスよね」

どうでもいいから早く日誌に手を付けるよ。なんで二人でお喋りして時間潰してんだよ。思わず百合沢に嫉妬の籠った殺気を放つが、天然で鈍感な百合沢は気付く事はない。

「メアド交換しよーって言った」

「え、マジツスか。自分にも春が来たんすね！」

「百合沢君の脳内は年中満開の桜が咲き誇ってると思うよ
それは遠回しに、百合沢をバカにしている。」

「そうツスかね？自分の頭の中は常にひまわりが咲いてるツス！」
自分がバカだという事を肯定しやがった！

「ちよつと隣のクラス行ってくるツス！」

「あ、うん」

百合沢は教室を出る時、こっちを見もしないで隣のクラスに行ってしまった。七倉という女がまだ居たのか、微かに笑い声が聞こえてくる。

多分、今週百合沢と週番に当たっていた出に、「百合沢と仲良くになりたい」とでも言ったのだろう。まさか百合沢がすぐに行動に移すと思っていなかったのか、一人残された出は茫然としていた。

「……………マジか」

あり得ない物を見たといった感じの声を絞り出した出は、一人で日誌を書き始めたようだ。

カリカリと一定のリズムで書いている出は、急に手を止めたらしいらしいというのは音だけしか聞いていないからだ。廊下に居る僕は、出が居る教室のドアに耳を当てて聞いていた。たまに通り掛かる人間には奇怪な目で見られるが、そこは自前の睨みを利かせればすぐにどっか行った。

「……………実家、帰りたくないなあ……………」

実家？

出の実家というのは入が居るはずだ。一度だけ、あの親友達と一緒に入を送りに行った時に行った、あの家か。

「実家帰ったら、まあた見合い写真見せられるんだー」

きつと両親は出の嫁ぎ遅れが心配なんだろうが、そんなのはまず僕が許さない。

しょうがない。外堀から埋めていって、出が逃げられないように雁字搦めにするか。とりあえず、非常に嫌だが入から攻略するとしよう。

場所を変えて、ファミレスに入り、ドリンクバーで飲み物を取ってきてから、一気飲みした三人は同じタイミングで、コップをテーブルに叩き付けるとようやく頭の中の整理が付いたのか僕をマジマジと見ながら口を開いた。

「何言ってるんだ、お前」

柔らかかそうな黒い短髪に、愛らしいベビーフェイスなのにも関わらず、顔に似合わない長身で、キツチリとネクタイを上まで上げて涼しい顔をする知的系イケメン、新藤^{しんどう} 勇雅^{ゆうが}。今の俺の敵は親友であるこの男である。理由？理由なんて、出の好みのタイプが知的系メガネらしいからだ。コイツがメガネをかけ始めたその瞬間からそのメガネを叩き割る気満々である。

「人に義兄さんと呼べだなんてトチ狂ったか？」

軽いウェーブが掛かった茶髪を軽くかきあげながら、切れ長の緑色の目で、勇雅より少し低めの身長^{きりやま}の桐谷^{ちか} 愛は、勇雅にグツタリと寄り掛かって不審な目で僕を見る。チ力はチャライ見た目に反して、中身は堅物だ。

「そんな事ありません」

「ていうか、敬語キモい」

固そうな金色の頭に手を乗せて、力を込める。

「痛い痛い痛い痛い！！！！！！」

明里^{あかざと} 圭一^{けいいち}は小柄の体に、猫のように吊り上った大きな黒い目が特徴だ。実際、猫のように気まぐれなところがあり、でも人懐っこい性格のせいか陰で家猫と呼ばれて周りから愛されている。

「出の好み^{あかざと}が知的系メガネらしくて」

「方向性間違ってるぞ」

ダルダルとツツコミを入れてくるチ力を無視して、話を続ける。

「そうしたら、下っ端の奴が知的系といえば黒髪にメガネだと言っ

よくよく思い出せば、不良の仲間達のおつむはまあ、最悪だ。

「バカばつかだったな……」

「何を指して言っているのかわからないが、お前の頭が大丈夫か？」
「恋は盲目なんだよ。一人の女に好かれようと俺は一生懸命なんだよ」

第一印象は大事だ。いや、出の俺に対する第一印象は最悪だっただろうが、そのイメージを払拭させなきゃ出とちゃんと話すら出来ないだろう。

「つか、入の姉ってどんな奴？」

「うーんとねえ……」

さっきまで驚愕のあまり黙っていた入がようやく口を開いた。かなり衝撃的だったのだろう。というか、多分だが、出が通っている学校を初めて知ったという感じがした。

「出は………あれ……？」

五分という短い間、ずっと入が何を言い出すのかを待っていた俺達は、入がダラダラと冷や汗が掻きはじめた頃に、一口水を飲むと、チカが動き出した。

「飲み物持ってくるけど、何か持ってくる？」

「俺、カルピスー!!」

「お子ちゃま。俺は、ブラック」

「んだと!？」

「俺もブラック」

「んだと!!?」

お子ちゃまな圭一の頭をグリグリとテーブルに沈ませつつ、入のコップも何気にチカに預ける。

「そついや優貴、今度の春休みって何して過ごすんだよ」

「出とデートの予定立ててる」

「まだ付き合ってたねえのに気いはえーよ!!」

「んだよ。オメエ等はなんか計画立ててんのかよ」

「春休みは人と一緒に旅行の計画立ててるが」

旅行か：

出と初デートは温泉旅行とかいいな。その前に、出のあの成績では春休みどころの問題ではないだろうから、徹底的に勉強だな。

「んで、彼女ってどんな子」

「悪戯好きで、貧乳」

「貧乳関係なくね?」

もう一度圭一をテーブルに沈ませる。

「ボケ体質で、ツツコミどころ盛り沢山」

「芸人になりてえの、その子!?!」

圭一の頭をテーブルに押し付けると、「いたたた!」と悲鳴をあげるが気にしない。

「知的系インテリメガネがタイプで、お菓子が大好き」

「将来のデブ候補」

ドゴツと圭一の頭を殴る。

「ボケかましてるわけじゃねえんだよ」

「ごめんなさい」

ドスを利かせた低い声で言ってやれば、圭一が即座に謝ってくる。

これはお馴染みの光景である。

「持ってきたよ」

チカが良いタイミングで、飲み物を持ってきて、それぞれの前に置く。

「で、入の姉ってどんな子?」

「うーんとねえ、悪戯好きで、ボケ体質で、お菓子が大好きな子だよ！」

入はきつと出に避けられまくっていて、出という姉の存在がどんなものかわからなかったのだろう。何せ、出の嫌いなものトップ1に君臨しているのは、妹である入だからだ。

物心付いた時から周りも自分にも興味なんてなかったんだと思う。双子の姉の出は眼中になかった。

双子だというのに、誰よりも過ごした時間は長かったはずなのに、顔さえ思い出せない。そんな私は異常な程、周りに関心がなかった。出が何を話したか、とか、どんな表情をしていたのかなんて、私は……知らない。

違う高校に、出が入学してたのに気が付いたのはずっと時間が経つてからだった。

小学校も中学校も、同じ学校で、高校もずっと一緒だと思ってた。思ってたから、夏休みが始まる直前で、ようやくと気が付いた。

「…辞書忘れてきちゃった…」

「え、今日って辞書使う日だったけ？」

「ううん。今日は放課後ちょっと勉強してから帰ろうと思って」

「相変わらず真面目だねえ」

「あはは…」

曖昧に笑って、比較的仲の良いクラスメイトに愛想笑いを見せた。この子は、友人ではない。何回か一緒に遊んだだけのただのクラスメイトの一人にすぎない。

勉強してから帰ろうと思ったのは本当。家に帰ると母親が煩いから、家に帰る時間を先延ばしする言い訳を作ってるだけだ。

「ちよつと、姉の所に行つてくるね」

「姉なんて居たの？」

「居たよー。双子の姉がね」

携帯を取り出して、新規メール画面を開く。

「ねえ、私の記憶が正しければ、うちの学年で真柴つて苗字の奴、アంతだけよ」

「……………え？」

かなりの間を開けて、ようやく絞り出した声は、自分でもわかるほどに驚愕に満ちていた。この子の記憶違いなのではないかと思つて見た目に反して女の子大好きな勇雅にメールを送る。勇雅はあんな堅物な容姿をしていて女遊びが激しくて、校内の女子の顔と名前は全部覚えているというアホの子だ。

「ねえ、入。あんたの姉ならすぐに噂になつてるわよ」

「……………も、もしかして、入学してからずっと引き籠りになつてるとか？」

「それも結構珍しい事だから、すぐに噂になつてるわ」

呆れたと言わんばかりに、緩く首を振るこの子は重たく長い溜息を吐き出した。

携帯が震え、すぐにメールを開けば、「そんな子は学校に居ない」とやたらとキツパリとした答えが返ってきた。

勇雅は、次席入学したらしく入学式が終わつてすぐに絡んできた。

勇雅は自分が主席だと思つてたらしくかなり悔しがっていた。

「……………うそ……」

メールの内容に愕然としながら、では出は一体どこの高校に行つたというのだろうと一向に冷静にならない頭で必死になって考える。だいたい、家族の誰もそんな事言つてなかった。

「お母さん！」

放課後、予定してた勉強を放り出して、家に慌てて帰るとお母さんは私の大嫌いな人参の皮を剥いていた。

「人参何に使うのよ！」

「今日はカレーよ」

「やった！」

カレーは味が濃いから人参を薄く切ってもらえれば食べられない事はない。味しないし。

「じゃなくて……。出は？」

「……………は？」

カンカラカーンという虚しい音を立ててお母さんが持っていた赤いプラスチックのピーラーが落ちた。

「出、まだ帰ってないの？」

「……………え？」

目玉が零れ落ちそうなほど瞼を限界まで開けるお母さんは、瞬きする事を忘れて私の方を見る。

「……………出なら、今通ってる高校に近いところにアパートの一室借りてるから家に居ないけど……」

「……………え？」

今度は私が目玉が零れ落ちそうなほど瞼を限界まで開ける。

「言っとくけどね、最初に言ったわよ。それこそ、入が今の学校入学する前に言った。それに入の目の前で引越し作業もした」

「……………え？」

「あんだどれだけ出に関心なかったのよ」

それから出が今通っている学校名を聞いて、「不良の溜まり場じゃない！」と叫んだ後に「なんで私と一緒に高校じゃないの」と聞けば、出の成績の事を初めて聞かされた。出の成績ではレベルの高い高校には入れないし、気付けば高校の受験を終わらせて合格通知も貰った後だったのだと言う。

「ていうか、なんで気付かなかったの。流石に同じ家に居るんだからわかるでしょ」

「……だって、出と家で顔合わせる事ほとんどないもん」

(ま、まあ、避けられてたからね……)

その時のお母さんの顔が物凄く引き攣った笑顔だった事に下を向いていた私には気付かなかった。

それから、なんとなく普段は入る事のない出の部屋に入ると、自分の部屋とは違った匂いがして一瞬、知らない人の部屋に入った気がした。

ベッドと、机と私とお揃いのオレンジのカーテンが垂れ下がったなとも殺風景な部屋のクローゼットを開けば、多分お母さんが、出がいつ戻ってきてきてもいいようにとある程度揃えた衣類がハンガーに掛けられてあつてその下には小さい本棚があつた。その中にアルバムを見つげ手に取ると、その場に座り込んで1ページ1ページ開いていく。

「……これ…出…?」

自分とは似ていない顔をマジマジと見ながら、それでも自分と似ている共通点がある事に気が付いた。

しばらく見ていなかった双子の姉の顔を忘れるなんて、私はどれだけ出の事が眼中になかったのだろうか。

高校は楽しかった。いつの間にか、勇雅が友達になっていて、気付けば、チカも圭一も、優貴も私の傍に居た。

それでも時たま、ふと出の事が脳裏に過ったけど、それだけだった。出の事で何か気にする事もなければ会いたいと思う事もなかった。ただ楽しい毎日を過ごしていただけだった。

「俺、転校する事にした」
「は？」

放課後の教室で、優貴が唐突に言った言葉だった。優貴は他の三人と違って、いつもどこか詰まらなそうだった。たまに私に見せる優貴の目には軽蔑の色が少しだけ見えた気がした。いつもは全く気にならない事だけど、今日はなんだか気になった。

「なんでだよ！」

「自分の世界を広げる為だ」

圭一の怒鳴り声にも動揺する事なく淡々とした喋り方をする優貴がまるで別人に見えた。優貴は世話焼きだ。私が調理実習の時に失敗してもフォローしてくれる。

「親父の会社を継がなきゃいけない。その為に必要な事だ」

優貴のお父さんは、学校の理事長をしている。この高校だけではなく、いくつかの高校と大学と、専門学校の理事までしている。つまり優貴のお父さんは教育者だから、「ここ以外の高校に行つてどんな生徒とでも触れ合えるようにして、教育者として何が必要なのか学んで来い」と言われたらしい。

どこからどこまでが本当なのかはわからないけど、優貴はここが好きではない事がなんとなく分かっていた。だから、チカと勇雅はあえて何も言わなかったのかもしれない。

「元気でな」

そう言っつてとつとと去って行くこととする優貴の背中に圭一が、空き缶を投げ付けていて優貴にラリアットを食らわせられていた。自業自得。

それから、出と接触する事はなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7485u/>

大嫌い

2011年11月3日09時46分発行